資料 2－2

久留米市の子ども・子育ての現状と今後の取組への意見
（令和６年度第１回部会での発言概要）

１　乳幼児期・子育て部会

(1) 現状

・ＳＮＳなどにより情報過多で何をしたらいいのか、何が正解なのか、自分だけが出来ていないのではと、すごく不安になっている保護者が増えている。
・子ども達に男女平等の意識を持たせるだけでなく、周りの大人や地域、社会がまだまだ男女平等ではない。
・男女平等の意識は高くなっているが、家庭に入ると男女平等でない役割分業が残っているのではないか。そこが、結婚が遠のく理由ではないか。
・子育て支援センターや校区サロンをかなりの頻度で利用するが、新規の参加者はなかなか見かけない。一部の人ばかりが来ている気がする。
・久留米市は、もう一歩頑張ると、みんな安心して、子育てしやすい、街になる。多胎児にやさしい街は、一般の人たち誰にでもやさしいと思う。
・中小企業で人数が少ないところは、結婚で皆さん辞めたとか、妊娠した従業員がいなかったなど、古い時代がそのまま続いているところもある。育児休業の取得など、どうすればいいのか、話を聞きたい所がたくさんあると思う。
・社会保険労務士会の支部があり派遣できるので、妊娠中・育児中でも休みが取れて安心して働ける、暮らしていけるサポートができる。

(2) 今後の取組

・地域子育て支援拠点も、他の子育て支援の情報を関係者と共有できると、もう少しスムーズに対応できる。
・出産できるのは女性だけで、その女性が久留米で定住して働きたいと思うような社会づくりが必要。
・学業のために一旦久留米を離れても、Ｕターンして戻ってきてもらえるような魅力のある働き甲斐がある久留米を目指す必要がある。
・「子どもを育てることは未来を育てる事業」、未来をつくる素晴らしいことをしているという目線を持って計画を策定してほしい。
・子どもが笑顔になるには、養育者が笑顔にならないと絶対ありえない。子どものケアをしながら、養育者に届くような何かがあればよい。
・ＬＩＮＥなどＳＮＳが普及して、市からも情報がたくさん来て、手に入りやすくなったので、今後とも続けて欲しい。
・参加したい講座があっても託児がないから行けない。せっかく講座をするならば、託児をしてもらうと有難い。
・子どもが乳幼児と就学児となったとき、今まで行くことが出来た子育て支援センターが行けなくなり、児童センターだけに行く場所が減ってしまう。年齢制限がない施設がもうちょっと市内にできたらありがたい。
・多胎児支援の活動をしえている人達の待遇・処遇が良くならないか。
・子育て応援給付金の一部をクーポン券として渡せないか。児童センターやく

るるんの一時預かり、エンゼル応援隊やファミリー・サポート・センターを利用してみようと思う人がでるかもしれない。
・おむつやミルクの配達をする、アウトリーチ支援がやれないか。そうすれば玄関を開けてくれる人もいる。
・校区サロンは２階でやっているところが多く、多胎児や年子の保護者は連れて行くのが大変。地域の先輩ママとデビューをする、ＷｉｎＷｉｎとなるシステムができないか。
・保護者が病気の子どもを看るのは疲れるので、病児保育の拡充や延長保育をしてほしい。
・久留米市はすばらしい取組をしているが、窓口がたくさんあって実際よく理解できない。少し集約できらたら市民もアクセスしやすくなる。
・家事代行の制度は久留米市にも用意されているので、もう少し働いている人が使いやすくして、子育て中の人に周知をしてほしい。

２　学童・思春期部会

⑴　現状

・教員は働き方改革を進めているが定時に帰るのは難しい。他の職種も同様。
・子どもを守る敷居が高く、家庭内の環境調整が必要な家庭も多い。
・世帯全体で困りごとを複合的に抱えている方が多い。
・３０数年、小学校低学年のときから引きこもりで、社会でもう一度チャレンジする機会がこれまでなかったのか。２０代でも結構いる。
・少しずつ社会に戻る人もいるが、本人の思うようにいかない人もいる。
・ＨＰやＬＩＮＥが困っている人に届きやすい方法なのか。相談窓口を増やす、周知を徹底するでは、解決につながっていない。
・学童保育所の夏休みや年度途中での入所枠が不足している。高学年受け入ればてきていないところもある。
・通級教室や療育に通う場合に親ができない送迎をボランティアに頼みたいとのニーズがある。
・手厚いサポートの事業が立ち上がっているのはありがたい。
・学年が変わると先生に情報が伝わっておらず同じ問題が繰り返される。
・食事も十分にとれていない、風呂も入っていない児童がいる。親も単身家庭で、子育ても頑張っているが、働き疲れてどうしたらいいかわからない、ということがある。

⑵　今後の取組

・海外で出生率が高い国の労働環境や取組が参考になる。
・世帯丸ごと早期に相談につなげ、早期介入の仕組があればいい。
・小学校から中学校へ進学するときなどで支援が途切れることがあるので、スムーズにつなぐ、本人に寄り添って、長く支援することが大切。
・安心して戻る仕組みや繋がりがあればいい。

・新１年生は学童保育所の申請書を配ってやるべき。
・学童保育所でなくてもいいので毎日通える居場所が地域に必要。
・特別支援学校に通っている子は、就職しないとその後、家に２４時間いることになる。子どもが成人して働くことができる社会になってほしい。
・子育て支援や補助金があったので習い事や学校に通学させることができたので、これからも取組を続けてほしい。
・学校で起きた問題でも、先生だけでは解決しないので、他のサポートが必要。窃盗などの問題は中間機関があれば解決するのではないか。
・子どもだけではなく保護者同士が集まり相談できる場所や皆が行きやすい場所があるとよい。
・自尊感情が低いので、先生だけでなく沢山の大人からの評価が必要。
・見て欲しい、構って欲しいという愛着に課題がある。アタッチメント理論をやらなければならない。
・レジリエンス、折れない心、立ち直る力、弱みを見せて欲しい。
・自分のことをうまく表現できない、自分のことを見て欲しい、構ってもらいたい子どもがいる。保健の先生や担任、スクールカウンセラーへの相談など、もう少し気軽に、安心して話ができるようなところがあればよい。
・医療的ケア児が小学校に進学する時期になると学校をどうしようか悩む保護者が多い。受皿を多くしてほしい。
・ヤングケアラーは、医療機関やサポートセンターなどが提携して相談する道筋をつくり、皆で連携して守っていけばよい。
・大人が笑顔で生活していると子どもも家庭内で笑顔なので、大人のワーク・ライフ・バランスを進めるべき。
・今の時代に合った新しい平等や公平の視点で、これまでの取組を検証し、新しい取組を検討してほしい。

３　青年期部会

(1) 現状

・出生率減少の問題は、そもそも結婚しない男女が多いことが原因で、結婚して家庭を持ちたいという意識がなくなってきているからだ。
・本当は「結婚して子どもを産もう」と考えている方もたくさんいるが、そこにたどり着かない、厳しい状況にあるのだと思う。
・ＳＮＳの影響で、結婚に対する理想が高くなっているのではないか。
・不登校が増えている原因は、親が子どもに寄り添ってないからではないか。両親が共働きで帰宅後は家事で精一杯で子どもに寄り添えない。核家族が増えたことも原因。
・不登校は個人の課題ではなく環境的なもの。
・人に迷惑をかけていけない意識から、全て自分で子育てをしなければならないイメージがある。
・非行少年はひとり親の家庭が多く感じる。相談相手がいないことが多く、環

境がそうしたのだと思う。
・ひとり親家庭が増えている印象がある。
・両親は、一生懸命子育てしているが、忙しくて、子どもに寄り添う時間がなかったり、子どもと顔を合わせる時間がない。自分の親の職業をしらない子どもも多い。
・日本型教育の課題として、今まで地域や家庭でやっていたことを学校がやるようになり、学校や教師の業務が拡大し、負担感が増している。
・学校は授業料無償化になっても色々お金が結構かかり、経済的に困窮している家庭は滞納してしまう。先生は分割払いを考えてしまうが、行政職員は支援につなげる対応をする。
・今の中高生は明るくなった。
・思春期なのに反抗期みたいなものもない。
・不登校は、昔は内申書で不利だったが、どの学校も不登校の生徒を受け入れる制度にかわっており、色んなチャンスが広がっている。
・学校は、今、子ども達がやりたいことや、持っているものをどう伸ばしていくかの支援になっている。子どもの意見を尊重することが大切であり、校則にもきちんと反映するように変わった。

(2) 今後の取組

・小中学校の先生は人手不足で疲弊しているので、支援が必要ではないか。
・行政はクレーム処理に追われ、萎縮しているように感じる。市民とタッグを組んで取り組むべきではないか。
・子ども達が、学校帰りに近所のおじいちゃん、おばあちゃんの家で過ごすような取組もいいのではないか。
・年配の人たちの教育の場が必要。子育て世代の方が年配の人たちに潰されると感じるときがある。
・個人のプライベートやプライバシーが守られていることが、逆に人間関係の希薄化につながっている。だからこそ、お互いに繋がり合う機会や場が社会に必要。
・人に寄り添うことで、様々なことが解決しやすくなる。これはコミュニケーションから生まれてくるので、人と人が話す又は関わる場所は本当に重要。
・非行少年や不登校の子の理由を知る場をどう作っていくのか。そのようなことを計画の柱に据えるとよい。また、そのような子どもを支える大人の支援や計画も必要。
・子ども達が幸せになるためには、先生も幸せでないと実現しない。
・批判ばかりされるのでは、学校の先生もやりがいがなくなる。

4　育ちはぐくみ支援部会

(1) 現状

・子どもの数は減ってきているが、幼児教育研究所や特別支援学級の子どもの

数は、それほど変わらないか増えている。
・子育て中の地域とのつながりの視点では、障害を持つ子と普通の子を分けている。
・実際いじめを受けた子はアンケートに書かない、周りに相談しない。気づきにくい現状があり、どう拾い上げるかが難しい。
・スクールカウンセラーの数は増えたが使いづらい現状もある。いじめを受けている本人は、相談する発想自体がない。
・自殺に至るいじめは、相談があったら対応する状態では相談件数は増えない。
・親や地域の人に相談してよかった経験がない子どもが一定数いて、ＳＯＳを出すどころか、ＳＯＳを抱えているのに、誰にもばれないように必死に隠しているのが現状。
・子どもは、最初は見守り、話してきたら対等に正直に話すという体験を重ねて、９カ月ほど経つと、ようやく悩みを話してくれる。
・子育てに正解はない。
・要保護児童対策事業など様々な対策をしても、これだけ文化が発達いているのに生きづらいのか、児童虐待が増えるのは不思議だ。
・児童養護施設への入所理由の３～４割が保護者の入院で、心の病が増えている。
・中高生が自分のことを本当に隠さず話すようになるには２年かかると思う。それまでは何も否定せず聞くようにしている。
・家庭にも学校にも居場所がないという子どもが多い。
・外国ルーツを持つ方が増えている。学校行事に参加しない、学校の提出物を出さないなど、こういうことがうまくできていない。資料を読んだり、手続きなど、子どもだけではできない。外国にルーツを持つ子どもの支援は、大きな課題だ。
・子どもは減っているが、特別支援学校の生徒は非常に増えている。高等部は進路として就労を希望する生徒の現場実習を組むが、企業を開拓できず、足りなくなっている。
・ショートステイの利用件数が増えているが、それだけ子育て期の親子ともども疲弊している。

(2) 今後の取組

・１８歳を過ぎた子どもの預け先を心配する方もいるので、つながりを持って切れ目ない支援を考えて欲しい。
・いじめた側を調査しても、いじめと認識していない。いじめられた子がいじめと思ったら認定される制度なので、全体的に考え方を変える必要がある。
・様々な問題を抱える子ども達が大人にはなしてもいいと思える環境づくりが優先されるべき。大人が子どもの話を聞く練習する必要がある。
・ＳＯＳを出す経験をしないと、ＳＯＳは出せない。教えるのではなく、体験してもらうことを増やすことが大事。
・ひとり親家庭は、正規雇用が増えたとはいえ、低所得者が多く、生活は厳しいので、使い勝手がよい制度、就労しやすい環境をつくってほしい。
・ひとり親家庭は、ダブル・トリプルワークをしている人も多く、子どもが夜

ひとりなるときの見守りが必要。
・ひとり親家庭では、子どもを見るために正規から非正規雇用に変わり所得が減り、厳しいので、行政も使い勝手の良い制度で様々な支援してほしい。
・児童養護施設の中で一番大切なことは、毎日子どもから話を聞くことで、そうすることで、やっと大人を信用していく。誕生日を祝うと、子どもは本当に嬉しそうにする。存在を尊重することを繰り返しやっていかなければならない。
・高校生になると支援が途切れるので、もう少しサポートしてほしい。
・放課後等デイサービスの質が悪く、行政としてもサービスが届いているか検証してほしい。
・社会福祉施設も足りない、地域格差があるので検証してほしい。